

Ladakh 自転車旅行記

竜野真維

京都大学医学研究科医学専攻 人間生態学（フィールド医学）

はじめに

2004年の8～9月、大学生だった私は、LadakhのKargil～Leh間を自転車で旅行した。とても印象深い旅であり、今でも時々懐かしく思い出す。今となっては記憶の不確かな部分も多く、正確な記録として残すことはできないが、13年経った今でもよく憶えているようなことを挙げ、書き連ねてみたいと思う。美しい自然や素朴な人々のことなどを思い出しながら、医師となってフィールド医学の道を志し始めた今の視点からも、少し振り返ってみたい。

自転車旅行について

それまで、スポーツとしての自転車や、長距離走行のためのスポーツバイクの存在すら知らなかった私が、自転車旅行の楽しみを知ったのは大学1年生の春だった。北海道大学医学部に入学した私は、4月、新歓の季節に医学部スキー部へ入部した。しかし本格的にスキーができるのは冬になってからなので、それまでの体力作りとして先輩に教わったのが自転車だった。一番始めに、札幌から峠を越えて支笏湖へ連れて行ってもらったのを覚えている。こんな山道も自分の脚で登りきれものなのだとすることに感動し、今までにない達成感を味わった。以来、少しずつ走行距離を延ばし、荷物を積んで数日がかりのツーリングにも出かけるようになった。北海道内を一通り走った後は、海外でのツーリングの楽しさを覚え、そうして自転車にのめり込んでいった結果、冬を待たずにスキー部を退部してしまった。

自転車旅行には、他にない醍醐味がある。まず、自分の脚で移動するという達成感があり、目的地にたどり着くまでの距離や道のりの険しさを実感できるのが良い。そういう意味では歩くのも良いかもしれないが、自転車だと1日で100km以上を楽に移動できるので、それなりの範囲を旅程に含められる。また100kmも走れば大抵は次の集

落まで辿り着くので、宿や食事の心配が少ない。次に、目的地に到達するまでの風景の移り変わり、一般の人々の普段の暮らしぶりを眺められるのも良い。これは実際に自転車旅行をしてみるまで気づかなかった。目的地とするような観光名所では、多少なりともお客様向けの対応をされるが、特別な名所もない普通の集落で、飾らない普段の暮らしを眺めていると、土地の人々の気質や生活を自然と肌で感じられるように思う。思いがけず親切にしてもらおうようなことも多く、目的地よりもむしろ移動途中のほうが印象深くなることも多かった。また、荷物を積んだ自転車は人目を引き、ちょっとした話の種にもなるので、地元の人と交流するきっかけになる。特に今回旅したLadakhでは、傾斜の激しい土地であるためか自転車はあまり普及しておらず、物珍しかったのか、子供はもちろん、ちょっと不良っぽいお兄さんたちまで寄ってきて、試乗は大変好評であり、話もよく弾んだ。

Ladakh地方はインド領再北に位置し、ヒマラヤ山脈、カラコルム山脈といった険しい山々に囲まれる山岳地域である。標高3000～4000mの高山にあつて強い日差しと乾燥にさらされ、旧王国首都であるLehを中心都市として河川沿いに集落が点在している。辺境の山岳地帯であるものの、インドと中央アジアを結ぶ交易路沿いであり、かつては王国として17世紀に栄えた。旧王国にはチベット仏教各派による盛衰の歴史があり、宗教的・文化的にはチベットとの関わりが深い。その西部はイスラム教文化の影響を受けている。旧王国は19世紀に滅亡し、紆余曲折を経て、かつての勢力圏は現在パキスタン・インド・中国の支配下に入った。現在に至るまで国境の係争が続いており、文化的・地理的に複雑な背景を持つ地域である。

Ladakhの雄大な自然と美しい山々には強く惹きつけられる魅力があり、標高の高い峠を越える

道程は、自転車で越えてみたいという挑戦意欲を掻き立てられるものであった。また、独特の文化をもち厳しい自然の中で生活している人々と、直接会って話して触れてみたいという好奇心もあった。このような理由で、大学2年生の夏休み、中国に続いて2回目の海外自転車旅行として、Ladakh へ向かうことにした。

旅程の概要

前半は一人旅、途中で友人と合流する予定にしておき、そのための日数合わせなどの都合もあって、少々変則的な移動になった。私は飛行機で Delhi に到着したのち、Srinagar を経由して Kargil まで、持参した自転車をバスに積んで移動した。Kargil 到着後にその周辺で数日過ごしてから、本格的に自転車での移動を開始した。まずは Zaskar 方面を目指そうと南下したが、途中で路面の舗装が途絶えてしまったので、一泊して引き返した。それから、Mulbekh や Lamayuru などを経由しつつ、数日かけて Leh まで走った。その後、Manali に到着した友人と合流するため、自転車をバスに積んで Leh から Manali まで移動した。当初は、Manali から Leh に向かって自転車で登る計画をしていたが、バスの車窓から下見していると、道のりは予想以上に険しく、自分たちのような初心者には厳しいように思えた。結局、また自転車をバスに積んで Leh まで戻ってきて、Leh から自転車に乗って出発し、Wakha や Dah などを巡りつつ、Kargil までの間を再び走った。1ヶ月と少しの滞在であった。

Srinagar

当初、Delhi から自転車で走り始めることも考えていたが、交通量の多さと舞い上がる土埃をみて、その気をなくした。まず近郊まで移動しようと、Delhi から北へ向かう交通手段を探したところ、数日のツアーに参加する形で Srinagar へ向かうのが良いと勧められた。Srinagar はパキスタン国境に近く、治安の問題が懸念されることは知っていたが、交渉の成り行きで結局 Srinagar へ向かうことになった。幸いなことに、滞在中に治安の悪さや緊張を感じることはなく、Srinagar は落ち着いた美しい街だった。ツアーでは、Mughal 庭園やモスクなどの見所を観光し、旅行会社スタッ

フの親戚らしき裕福そうな家庭にホームステイして、家の女性陣と一緒に家事を手伝わせてもらったり、近所の親戚を訪ねて行くのに同行させてもらったりした。訪ねていった先では親戚や友人かと思われる女性たちが集まり、屋内でとめどなく談笑していた。外ではもの静かなイスラム女性も、屋内では気ままな姿で、日本の女子高生とさほど変わらないような様子で振舞っているのが意外で、可愛らしく思えた。町の中心部にある Dal 湖には沢山のボートが行き交っていた。通学する学生たちの船や、アイスクリームや生活用品を売る小舟もあって、水上を生活の場とする人々の暮らしが垣間見えた。

旅行会社から Srinagar に長く滞在するよう引き止められ、当初はすぐに Ladakh へ向かうつもりが、予定外に長く滞在することになってしまった。そこから抜け出して Ladakh へ向かう交渉をするのはそれなりに大変だったが、振り返ってみると Srinagar での滞在も良い経験で、高地順応にもなっていたのかもしれない。後述する Kargil でも数日留まっていたためか、旅程を通じて高山病らしき症状を自覚することは殆どなかった。Srinagar から Kargil へ向かう道は軍事的な警戒が敷かれていると聞いたので、ここから Kargil までもバスで向かうことにした。Kargil に近づくにつれ、徐々に緑が少なくなり、乾燥した荒い山肌が目立つようになってくる。空の色が水色から鮮やかな濃い青に変わっていく。こんなに濃い色をした空があるのだということを初めて知った。

Kargil

Kargil に着いて街を散策していると、同い年くらいの青年に声をかけられ、彼が街を案内してくれた。彼はイスラム教徒で、アラビア語を勉強しているといい、「すべての事はコーランに書いてある」と言った。日本で育った自分には理解しにくい感覚だな、と思ったので印象に残っているが、彼と話すのは楽しかった。この日、ちょうどお祭りがあるのだと教えてもらい、彼に案内と解説をしてもらいつつ見物に行った。地元の人がたくさん集まっていて、結構大きな祭りのようだったが、外国人は私だけだった。珍しく思われたのか、地元のお偉方が並ぶような特等席へ案内され、絶好の場所で観覧させて頂いた。近隣地域の人々が、

チベット風、Drokpa 風、ムスリム風など、それぞれの民族衣装を纏って次々に入れ替わり、歌や踊り、楽器の演奏などが披露された。それから、馬に跨った男性たちが入場し、ポロの競技が始まって会場は盛り上がった。ポロはこの辺りの花形スポーツだそうだ。初めて見るものばかりで、歌や踊りの詳しい意味まではわからなかったが、とても楽しく興味深かった。

しばらく Kargil を拠点として周辺を走っていたので、ここの滞在日数がいちばん長く、色々と思入れのある場所となった。しつこい客引きとトラブルになりかけた時に、同じ宿に泊まっていた若いチベット男性のグループに助けってもらったこともあった。彼らは、Ladakh の人々よりも日本人寄りの顔立ちで、そのためもあってか親しみやすく、温厚で素朴な好青年だった。聞くと彼らは亡命チベット人で、祖国チベットの役に立つためにと考え軍属しているとのことだった。この地域が軍事的な緊張状態にあるということも聞いていたので、彼らの身の上を案じてしまった。

Karchey, Suru Valley

Kargil から 40 km くらい南下した Karchey というところの河岸に、岩壁に彫られた磨崖仏があるということで見に行った。現在、この周囲はムスリムの居住地であり、そのためか磨崖仏の周囲には何もなく、訪れる人もあまりなさそうだ。仏像はただ青い空を背景にして佇むのみであった。それがまた、素朴な仏像によく似合って美しいと思った。そこから南へ進んでいくと、川沿いに段々畑と緑の並木が並ぶのどかな砂利道となり、放牧されているヤギの群れや、草を刈って運ぶ女性たちが見えた。野良仕事をする彼女達は、のんびりと談笑しつつ楽しげだった。遠くで草刈りをしてきた女性に望遠レンズでカメラを向けると、しっかり視線を合わせて微笑まれたので驚いた。数百メートルは離れていたのに。とても目が良いのだろう。

Suru 川沿いに Zanskar 方面へ南下しようと思っていたが、未舗装路を走るの想像以上に大変だったので、途中で引き返すことにした。まだ日の傾かない夕刻で、立ち止まった小さな村に民家以外の宿や商店はなさそうだった。引き返して日暮れまでに Kargil に戻れるだろうか、それとも次

の村に宿がある可能性を頼って進むべきかと迷っていると、村の少年に声をかけられた。今の状況を説明すると、今日はここに泊まっていくといい、と言ってくれたので、ありがたくお言葉に甘えることにした。少年の親戚宅へ泊めてもらえることになり、そこでは若い夫婦と人懐こい子供達が暖かく歓迎してくれて、非常にありがたかった。お宅にはたくさんの人々が親しげに出入りして、どこまでが親戚で、誰が近所の人だったのか、よくわからなかった。元気な子供がたくさんいる村で、小麦畑に囲まれた村のあぜ道を、日が沈むまで駆け回る子供達と一緒に過ごした。村のあちこちにヤギや牛が歩いていた。こんな村で生まれ育った人達を羨ましく思った。

Mulbekh

Kargil から南東へ約 40 km 進むと、Mulbekh という小さな集落があり、居心地が良かったので数日滞在した。道路沿いの山側にホテルがあって、そこから道を挟んだ河辺にはマニ車が見える。しばしば老人が訪れては、マニ車の周りをのんびり回っていった。ホテルは酒場兼レストランにもなっていて、夕食を食べていると、ラム酒を飲みに来た地元の小学校の先生と仲良くなり、それから数日、彼が周辺を案内してくれた。近くの山に Phokar Dzong Gompa、Shergol Gompa など無人の寺がいくつかあって、高僧が瞑想したとされる石窟が連なっている。それらを巡り、山の頂上まで登ると、素晴らしい景色があった。白い山肌と真っ青な空の、それ以外何もないところに鮮やかな五色のタルチョがはためいている。これほどタルチョの似合う風景はないだろう。信仰が発祥し育まれた土地の空気に触れて、初めて実感できる感覚があるのかもしれない。宗教者が聖地巡礼に赴く理由の一端を感じたような気がした。また、近くに磨崖仏もあるが、それはイスラム教徒によって一部が破損されたのだと聞かされた。ひと昔前には Leh で宗教的対立による暴動事件もあり、まして Mulbekh は、ムスリムと仏教徒の居住地区の境に近い地域である。普段の様子は一見穏やかに見えるが、民族や宗教の相違による軋轢の存在を垣間見た気がした。

Mulbekh はある時刻を過ぎると停電になり、電灯も消える。帰り道の途中で日が落ちると、夜空

は星で埋め尽くされ、星が多すぎて星座さえわからなくなるほどだった。地理的な好条件があるにしても、人間が光を灯さなければ、夜とはこんなに美しいものだったのか。ただただ驚き言葉を失った。車道まで降りて手をあげると、トラックが止まって町まで気安く運んでくれた。こういったことは当然といった雰囲気だった。

Lehまで

途中、Lamayuruなどでゴンパを巡りつつ、Lehへ向かった。途中で訪れたゴンパの僧侶は、普通の若者という雰囲気の気さくな人たちも多く、日本の「お坊さん」のイメージとは少し異なった。僧侶という職業が特殊なものではなく、一般的な職業の選択肢として普通にあるのだろうと感じた。途中のFotu La（Laは峠の意）は4094m、旅程で一番の高所であったが、ゆっくり登ったのでそれほどきつかった記憶はない。傾斜よりも激しい向かい風がつかった。ここでも山頂に五色のタルチョがはためいていた。そこから下ってLehへ向かうと、ザンスカール側とインダス川、2つの川が合流する地点で水の色が大きく変わり、山頂に積雪の残る高山を背景としてオアシスのように緑が増えてくる。Lehに入ると、ずいぶん都会にきたような気分になった。

Wakha

Wakhaには尼寺があって、いきさつは忘れたが、Lehから引き返していく道中、友人と共にそこで一泊させて頂いた。お世話になった寺の尼さんたちはみな若く、日本でいうと小学校低学年～中学生くらい少女たちだった。年上が年下の面倒をみながら生活している様子で、みな姉妹のように仲良く、小さな子たちも、水の入ったポリタンクを運ぶような力仕事を一生懸命手伝っていた。修行の場だというのに、私たちがお邪魔して良かったのかどうかはわからないが、快く招き入れられ大変親切にもらった。子供とはいえ、こんなに素直で純真な人たちには中々会えないだろうと思うような尼さんたちで、感心しきりだった。年少の子供たちを自転車に乗せて坂を下ってみせると、とても喜ばれて何度もせがまれた。親切にもらったお礼に、楽しい時間を過ごしてもらえたのであれば良かったと思う。

Dah

Dah周辺は、Drokpaと呼ばれる民族の集落であり、他の地域とは人々の顔つきが明らかに異なる。Kargilの祭りでも披露されていたが、色とりどりの生花をたっぷり盛り付けた髪飾りの華やかな民族衣装が有名で、「花の民」とも呼ばれるそう。村の入り口からして雰囲気が違う。村内の小道はすべて石垣できれいに整えられており、草木や花が多く、道沿いに植わった植物の緑も濃い。土壁の家の平らな屋根には、杏だろうか、赤い実がむしろの上で干されていて、日当たりのいい広場で老人と子供、それからロバが日向ぼっこをしていた。村の小学校を通りがかると、先生と子供が建物の外に赤い絨毯を敷いて勉強中であった。私たちが通りがかったことで子供の興味を引き、勉強の邪魔をしてしまったかもしれない。放課後の校庭で、子供を自転車に乗せてあげたりして一緒に遊んだことは楽しかった。

旅を終えて

以上、Ladakhで過ごした思い出、印象に残っている事柄について、とりとめなく書き連ねた。深く感動したことは、人々が自然の一部として、自然の振る舞いに合わせて生活を営んでいたことだった。生まれ落ちた環境のなかに自分の居場所を作り、そこで作物を育て、家畜を飼って、水を汲んで生活していた。都会では、住むところも食べるものも全て、人間が過しやすいように整えられ、ものは包んで店先に並べられ、何でも大抵お金で買える。しかし手軽に済んでしまうぶん、生物として生きていく、という基本的な営みを感じられにくくなっているようにも思う。またLadakhの人々は、物質的には決して豊かでないが、必要なものだけを持ち、無駄なく使っているように思われる。服はくすんで擦り切れた物ばかりだが、普段着なんてそんなもの、という感覚で、着られなくなるまで使っている。持ち物はすべて、そうやって最後まで無駄なく使っているのだと思う。物がすぐに手に入るようになった日本では、見栄えの問題や新製品が手に入るといった理由ですぐ買い替え、使えなくなるまで使うということを余りしなくなった。

「生きる、生活をする」という基本的なことが、当然の如く簡単にできるようになり —それは私

たちが長年求め続けた成果であり、それ自体は素晴らしいことに違いないが――代わりに、より良い、便利な物、楽しめる何かを探さなければ、充実した人生であると感じられなくなってしまったようにも思う。物も娯楽も人工的なものが多くなり、人間社会だけで完結する人工的な世界の中で、敢えて偏った言い方をすると、余分な消費をするために多くを費やして生きているような気さえしてしまう。そうしてみると、余計なものを持たない代わりに、生きるために必要な働きをして、家族や友人と助け合いながら日々を過ごすような生活は、生物として自然であるようにも思う。こういうことも、幸せや豊かさの一つの形ではないだろうか。「隣の芝生は青い」のかもしれないが。

今のところ世間の流れとしては、物質的な豊かさを求め、環境を人工的に整備する方向へ一方向的に向かっているように見える。逆方向に向かうことは難しいだろう。しかし、自然の一部、生物のひとつとして、まずは「生きる」ために生きるような暮らしの中にこそある、ある種の豊かさや、生きる喜びもあるのではないかと思う。Ladakhの人々の暮らしにまだ残る、近代社会が失ってしまったような良さは、これからも失われずに残って欲しいと願う。より良く豊かにというのは人類共通の願いであるが、そのために目指すところは何か、どうありたいかということについては、目に見えやすいものだけを求めるのではなく、皆が

よく考えながら進まなければならないのではないだろうか。

私は学生時代、「発展途上国で十分な医療を受けられない人々に医療を届けたい」と思い医師を志した。しかし、実際に辺境へ赴いてみると、物資や技術に不十分な点があっても、そのためだけに生活や文化の豊かさに優劣が決まるわけではなく、むしろ彼の地の人々のほうが優れている点も多いと気づかされた。「先進国の医療を後進国に伝える」という考えはどうしても自分に馴染まず、どうしたものかと考えていたときに、フィールド医学と出会った。まだまだこれからだが、未だに忘れられない畏敬と憧れの対象を、今度は通りすがりの旅人としてではなく、より深く関わって理解してみたいと思っている。

日本に帰国する時、大変名残惜しく思い、いつか必ず戻って来ると心に決めたにも関わらず、あれ以来 Ladakh を訪れてはいない。近年は観光地として有名になり、訪れる人も増えたということを知る。あれほど美しく魅力的な土地であったのだから、そうであっても不思議はないのだけれど、便利で綺麗になっていくことや、観光収入によって金銭の価値観が変わることで、かつて感じた素朴な美しさ、豊かさ、暖かさが損なわれていないことを願う。この文章を書いていて、近いうちにきっと再訪したいと思った。

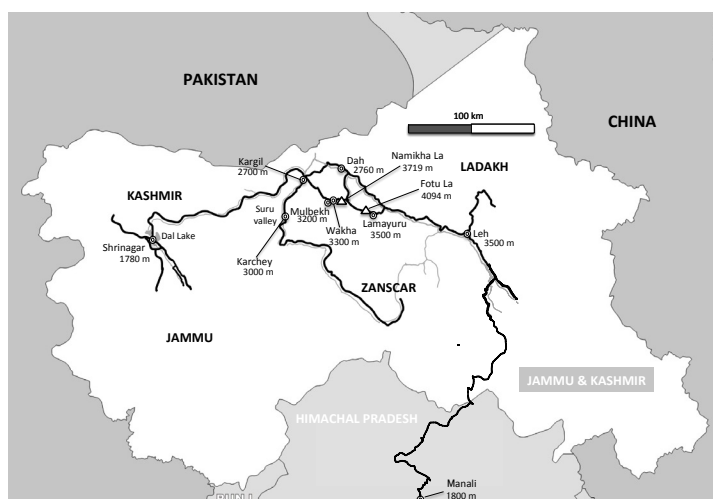


図1 Ladakh 周辺の略図 (http://d-maps.com を元に作成)



図2 Karchey の鷹崖仏



図3 Phokar Dzong Gompa の山頂にはためくタルチヨ



図4 Kargil の祭りにて、Drokpa の民族衣装で踊る女性たち



図5 Fotu La の頂



図6 Wakha の尼寺で



図7 Dah の小学校

Summary

Traveling Ladakh by Bicycle

Mai Tatsuno

Department of Field Medicine, Kyoto University Graduate School of Medicine

In August 2004, I traveled between Kargil to Leh in Ladakh by bicycle. I stayed there about one month. This is a record and memories of my journey. I hope I could express pleasure of traveling by bicycle, and how attractive the place was. Then, I'd like to explore thoughts about future issues seen from that.